

宗教シオニズム

イラン・パペ著、脇浜義明訳、田中一弘補訳

Palestine Chronicle 2024年1月1日

グローバル北の主要メディアと政府はハマスをISISと同質と見做す。これはイスラエルの思想の受け売りである。この比較が根拠のないいい加減なものであるという事実は別にして、狂信的宗教思想と暴力の結び付きは実際にある現象で、特に検討する必要がある。その現象はパレスチナではなく、イスラエルにあるのだ。

宗教的シオニズムという現象の起源は、二人のシオニストのラビ — クック一族の父親と息子の教えである。父親はアブラハム・イツハク・クック (Avraham Itzhak Kook、1865～1935) で元ロシア帝国領リトアニア生まれであり、大英帝国パレスチナ委任統治領で初代アシュケナージ主席ラビとなった。息子はツヴィ・イエフダ・クック (Zvi Yehuda Hacohen Kook、1891～1982) で、彼らの狂信的メシア信仰、人種差別的、原理主義的、宗教的入植運動である宗教シオニズムが、今やイスラエル政治的権力者の間で広がり、熱心にその教えに従って行動している¹。

父親ラビ

まず、父親のクックについて話そう。

アブラハム・クックは1904年にパレスチナに移住し、正統派ユダヤ教の思想に反対する強力な大物ラビとなった。正統派の思想にとっては、シオニズムは神の意志を人為的に改ざんしようとする世俗派の冒険的事業であり、従って支持すべきではないと主張している。今日でもこの考え方をする正統派ユダヤ教徒は多い。

委任統治パレスチナ — 1918から1948年まで大英帝国の植民地主義による支配 — において、彼はユダヤ人移民と土地の獲得を推進するシオニズム事業を祝福・奨励した。主席ラビという権威的地位から、パレスチナに対するユダヤ人の権利は神の意志であると説き、世界中のユダヤ人にパレスチナに入植することを勧めた。

1920年代にクックはムスリム住民を追い出してエルサレムの嘆きの壁付近の地区を拡大せよと要求する活動を積極的に行った。彼はムスリムに補償金を出す提案をした。この提案は、1967年の6月戦争の後、イスラエルが実際に実施しようとしたものである²。

クックの大きな遺産は国家宗教的イエシバ (学校) であるメルカズ・ハラヴ (ラビのセンター) の設立である。この学校は、息子のラビ・ツヴィ・イエフダ・クックに受け継がれ、宗教シオニズムの歴史で重要な場所となった。

息子ラビ

次に、息子のクックについて話そう。

ツヴィ・クックは狂信的メシア運動グーシュ・エムニム (Gush Emunim) のイデオロギー的元祖である。グーシュ・エムニムは1967年戦争の後占領地西岸地区とガザ回廊のユダヤ化を目指して、入植の奨励やアラビア語地名をヘブライ語に変えるなどの活動を行った。

時の経過とともに、グーシュ・エムニム運動はイスラエル政治システムの周辺部から中央部へ移っていった。活動家の何人かが重要閣僚に就くようになった。ツヴィ・クックは1982年に亡くなったが、父親以上にパレスチナへの入植活動に熱心だった。パレスチナへの入植は神の命令であり、ユダヤ民族の救い (redemption) を促進するうえで必要な行為という教えを説いた。

¹ アブラハム・イツハク・クックの弟にヒレル・クック (195～2001) という右派修正主義シオニスト活動家がいる。

² 嘆きの壁はローマが神殿を破壊したときに残った西の壁で、宗教シオニストは神殿再建を目指している。このクックの提案は、暴力でもってムスリム聖地を潰してユダヤ教聖地にする形で続いている。

1967年から1977年の間労働党が政権を握った期間は、クックの影響力は幾分弱くなった。しかし、労働党政権は民族浄化、時には虐殺を使って、直接的に西岸地区とガザ回廊のユダヤ化を実行した。宗教的教えでなく、世俗的社会的シオニズムというイデオロギーに基づいて。

1977年、右派リクード党が政権の座に就くと、ツヴィ・クックは、パレスチナ人密集地の中心に前哨基地を作って、次々と西岸地区を植民地化していく入植者の精神的指導者として有名になった。植民地化の促進によって西岸地区を脱アラブ化するのが、このような侵略的な植民地化の狙いであった³。パレスチナ人から土地、水、労働市場へのアクセスなどの資源を奪って、彼らを追い詰め、圧力下に置いた。

軍の援助もあって、入植者のこの暴力的なやり方が日常化した。虐待、嫌がらせ、場合によっては殺害などが、これらどんどん繁殖して増えて行く不法入植地付近で日常的に起きた。今もそれが続いている。

これら不法入植地の拡大は、イスラエル政府にとって都合がよかった。政府は、建前上、狂信的入植者の不法入植地として承認しなかったが、それは単なるジェスチャーで、実際には、西岸地区の入植者の活動は、現地の軍司令官の直接的な援助のもとで行われ、不法入植地は後に政府によって正式入植地として認められたのである。

これら狂信的暴力入植者たちのほとんどがメルカズ・ハラヴで教育を受け、ツヴィ・クックの教えに感化された連中であつた。彼らのパレスチナ人に対する残虐行為はその教えの勅令に従ったものである。彼らは政府が「エレッツ・イスラエル」(Eretz Israel、イスラエルの地)の土地の一部でもパレスチナ人に譲歩するのに反対した。ツヴィ・クックとその弟子たちがヨルダンも「エレッツ・イスラエル」に含めていることを忘れてはいけない。

さらに、この狂信的・暴力的入植活動を称賛する世俗派イスラエル・ユダヤ人がかなり多い。彼らは、英国統治時代の労働シオニストのパレスチナ入植活動の栄光を思い出し、その継続と見るからだ。

丘の上の若者

クックイズムの最も端的な表現として出現したのはノアール・ハ・ゲヴァオト (Noar Ha-Gevaot、丘の上の若者)である。このグループは、1998年にアリエル・シャロン (Ariel Sharon) 首相が「西岸地区の人が住んでいない丘を全部占拠してそこに定住せよ」との奨励に応じた数百人の若者たちである。それは、不可逆的な「既成事実」を作り、西岸地区を全面的にユダヤ化する道筋を確立する戦略であつた。ノアール・ハ・ゲヴァオトのやり方はタグ・メヒル (値札) と呼ばれる暴力行為で、パレスチナ人の農場、車、商売、コミュニティなどを攻撃して破壊した。モスクや教会に火をつけて燃やすこともあつた。もっと酷いのはパレスチナ人の家に火をつけて焼死させることもあつた。東欧でユダヤ人が受けたポグロムをパレスチナ人に行ったのだ。

若者の暴力行為の間、イスラエル軍はそれを傍観し、不法な乱暴を許したのである。最近ではこの狂信的メシア若者グループの活動がイスラエル国内のアッカ (Akka)、ハイファ (Haifa)、アル・リッド (Al-Lid)、アル・ラムレ (Al-Ramleh) といったアラブ人・ユダヤ人混合都市に入り込んでいる。彼らはパレスチナ人居住地区の真ん中に「学習センター」を作り、付近の住民に嫌がらせを行っている。2021年5月、「48アラブ人」(1948年のナクバのとき逃げずにとどまってイスラエル国民になったパレスチナ人) と呼ばれるパレスチナ人コミュニティに対する暴動を扇動したのは、主にこの入植者グループであつた。

彼らはまた最近別な暴力行為を行っている。パレスチナの聖地アル・ハラム・アル・シャリフ (Al-Haram Al-Sharif) の襲撃である。彼らの狙いはパレスチナ人の聖地擁護の反撃を引き起こし、それを暴動として弾圧することで、イスラム聖地のアル・アクサ・モスク (Al-Aqsa Mosque) を破壊して、その跡に念願の第三神殿を建てることであつた。第三神殿建設こそがユダヤ人の救済というメシア信仰を成就するのだ。

³ 彼らは西岸地区を「ユダヤ・サマリア」と呼び、政府命名委員会もそれを正式に採用したが、国連や国際社会はそれを認めず「西岸地区」という呼称を使っている。

ユダヤの力、宗教シオニズム

2022年11月の選挙で、「丘の上の若者」を支持する二つの政党、オズマ・イエフディト (Ozma Yehudit、ユダヤの力) とハジヨヌト・ハダティト (Haziyonut Hadatit、宗教シオニズム) が大きく議席数を増やしたため、彼らの脅威はさらに増大した。この新たに芽生えた力のおかげで右翼のベンヤミン・ネタニヤフは連立内閣を樹立できた。この宗教的過激派の代表は現内閣の閣僚である。ベザレル・スモトリッチ (Bezalel Smotrich) が財務大臣、イタマール・ベン・グヴィル (Itamar Ben Gvir) が国家安全保障大臣である。

スモトリッチもベン・グヴィルも、彼らの党の他の閣僚も、10・7攻撃の後に作られた小さな戦争内閣には入っていない。従って、現在ガザでイスラエル軍が行っている大量虐殺戦略は彼らの直接的指示ではない。しかし、イスラエルの次の行動、つまりユダヤ人入植者をガザ回廊に呼び戻す政策では、彼らが決定的な役割を果たすだろう。

この狂信的過激派政治家たちは、ガザ虐殺の他に、西岸地区のパレスチナ人社会への攻撃の激化を奨励している。さらに、「48パレスチナ人」(イスラエル国内在住のパレスチナ人) を標的にしたテロと人種差別という新たなキャンペーンの指導者である。

宗教シオニスト過激派は西岸地区南へブロン丘陵 (Hebron Hills) のパレスチナ人集落の集合体であるマサーファ・ヤッター (Masafar Yatta) でテロ襲撃や家屋破壊、さらに水源に動物の死骸を投げ込むなどの嫌がらせ行為を行い、数千人のパレスチナ人を追い出すことに成功している。そのとき軍隊の黙認という協力を得ている⁴。この地域は、歴代のイスラエル政権が、ネゲフ (Negev、the Naqab、ナカブ) からヨルダン川にユダヤ人のための領土保全を創り出すために、脱アラブ化することを望んでいた地域であった。

これら宗教シオニストのかなりの数の人間が今やイスラエル権力機構、保安機構、軍隊の中に入り込んでいる。

20世紀初頭に一人のラビが入植者による植民地プロジェクトによってユダヤ教を国教とするユダヤ国家を作ろうと決定し、最終的には世俗的シオニストが成し遂げられなかったことを成し遂げる神権政治を構築するのが、彼らの目標である。世俗派が成し遂げられなかったこととは、パレスチナ人の全滅である。

近代ドイツ研究者であるイスラエルのモシェ・ツィンマーマン (Moshe Zimmerman) は早くも1995年に、クックの弟子たちをナチ時代にユダヤ人を迫害したグループ「ヒトラー・ユージェント」と同じだと言った。彼はイスラエルの新聞『イエディオト・アフロト (Yedioth Ahronot)』のインタビューで次のように語った。

「イスラエル社会には私が躊躇なくナチの模倣者だと言えるグループが存在します。ヘbron丘陵地帯の入植者の子どもたちを見てごらんください。彼らはまさしくヒトラー・ユージェント (Hitlerjugend) と同じです・・・生まれたときから悪いアラブ人、反ユダヤ主義、すべてがユダヤ人の敵という考えを叩き込まれて、ヒトラー・ユージェントのように偏執病的な至上主義者になっています。」

⁴ 2021年100人程の覆面をした入植者暴徒がマサーファ・ヤッターを襲撃したが、イスラエル政府は「これはユダヤ人のやり方ではない。暴徒を裁判にかける必要がある」と言って、関与を否定した。